

目 次

| | | |
|-------|-------------------------------------|---|
| 佐々木 隆 | イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ— | 1 |
|-------|-------------------------------------|---|

イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて

—高等学校から大学へ—

佐々木 隆

プロローグ

2018年2月14日に文部科学省は時期高等学校学習指導要領の改訂について発表した。新設・見直しは27科目となる。ここでそのすべてを取り上げることはできない。これまで日本と世界という枠組みを中心にした世界史A・B、日本史A・B、地理A・Bは大きく枠組みが変わり、共通必修科目の「地理総合」と「歴史総合」が新設されることとなった。特に、歴史では時系列での学習が中心であったが、同時代の世界を捉えることが可能となる。より世界を深く理解できるようになる。実際、大学の授業では外国の影響がどのように日本に届くのかを講義しても、学生の反応は決してよくない。これは日本史と世界史の流れが時系列になっているため、横軸、すなわち日本と同時代の世界の様子があまり理解できていないことが多いからだ。

さて、本稿ではよく島国という点で日本とよく比較されるイギリス文化の源流について、ケルト文化について注目したい。高等学校の取り扱い、そして大学では何を教えるのか、また、現在、このケルト文化はどのような影響を与えているかについて考察する。

1 高等学校の「世界史」

現行の学習指導要領では高等学校の「世界史」は必修科目、「世界史A」（2単位）か「世界史B」（4単位）のどちらを学ぶことになっている。まず単位数だけの違いを見ても、その取扱いが異なることは一目瞭然である。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（2014年1月一部改訂）では次のように科目の性格が記載されている。⁽¹⁾

世界史A

「世界史A」は世界の歴史の大きな枠組みと展開を近現代史を中心に理解させる科目である現代の世界は、国々や諸地域が緊密に結び付き、相互の関係を深め、また激しく変化している。そうした中で、現代世界の基本的な構造とその変動について、歴史的観点から把握しようとする要請が高まってきた。その要請に応じて設けられたのが「世界史A」である。今回の改訂でも、その趣旨を受け継ぐとともに、引き続き世界史が地理歴史科共通の必修科目であることを考慮して、近現代の世界の形成過程を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら、学習させることを第一のねらいとした

世界史B

「世界史B」は、世界の歴史の大きな枠組みと展開を、各時代、各地域の歴史の重要な事項を中心に学ぶ科目である「世界史A」が標準単位数2単位で近現代史を中心に学習するのに対し「世界史B」では標準単位数4単位で古代から現代までの世界の歴史の基本的な事柄を学習する。小・中学校までの世界の歴史の学習については、中学校社会科学において、日本の歴史の背景として取り扱われていることもあり、生徒にとって、高等学校の「世界史B」は「世界史A」と同様、初めてまとまった形で世界の歴史を学習する科目である。

「ケルト文化」についての取り扱いに注目するため、「世界史B」について注目しておきたい。なお、筆者が高等学校でヨーロッパの歴史を習ったときには、「ゲルマン民族の大移動」という表現であったが、現在では「ゲルマン人の大移動」と表現が変わっている。40年も前のことであれば教育内容も変わって当たり前であるが、現実に教科書以外のところでは「ゲルマン人」「ゲルマン民族」は混在している。

「世界史用語解説 授業と学習のヒント ゲルマン人」

注意 ゲルマン人？ ゲルマン民族？ 旧課程の世界史教科書の多くは、「ゲルマン民族」と表記していた。現在は山川出版の詳説世界史を初め、「ゲルマン人」としている場合が多い。これは、「民族」概念には多くの問題が含まれており、最近そのとらえ方が揺らいできていることの影響であろう。「民族」を固定的に考え、そこに何らかの価値を付与してしまうと、たしかに誤解のもととなる。ある「民族」に能力的な優越性を認め、その連帯感を強調する「民族主義」の行き過ぎは「ドイツ民族」「日本民族」などが呼号された例でも記憶に新しい。そのような民族観は一方で「ユダヤ民族」や「アイヌ民族」という劣等民族レッテルを貼って差別する構造を生み出した。このような民族観はすでに克服されたと思われるが、戦後は植民地の被抑圧民族の解放をめざす、新たな「民族主義」が台頭した。さらにソ連崩壊に伴い、ヨーロッパでも民族問題が吹き出している。現在は「民族」概念を幻想であり虚構であると見なす考えも出されている。そのような混乱の中で、安易に「民族」という用語を使用しない方がいいという判断が生じているのであろう。山川教科書では、「ゲルマン民族」や「ゲルマン民族の大移動」といった表現は無くなっている。それに伴って、「東ゴート族」とか「フランク族」など、〇〇族という表現も無くなった。(暴走族と混同されるとでも考えたか?) それにかわって「〇〇人」と表記されるようになったのだが、それでは個別の人を指すようで、集団としてのイメージがうすれ、なじめないところがある。もともと「モンゴル民族」という用語は残っており、統一性はよい。今のところ、「民族」表記は慎重にしよう、ということか。(2)

「ケルト文化」を扱っていく上でも、「ケルト人」は自然に触れていくことになるため、この「人」と「民族」についても言及した。

2 高等学校の「世界史B」の「ケルト」の取り扱い

尾形勇他『世界史B』（東京書籍、2012年3月検定済、2016）では「ケ

ルト人」について、「西ヨーロッパ中世世界の成立」では次のように記載されている。

ローマ人によって耕地が開発され、ブドウの栽培地も北進したとはいえ、アルプス以北のヨーロッパはまだ大半が森におおわれていた。そこには、すでに前6世紀ごろからケルト人が住みつき、彼らは鉄製の武器や装身具の製造技術において高い水準に達していた。神々と人間と妖精が交わりあうケルト神話の世界は、のちのヨーロッパ人の精神にも大きな痕跡を残している。その北方にいたのがゲルマン人である。

ケルトやゲルマン人は、小さな村落を形成しながら、半農半牧の生活をおくっていた。森は、薪・木炭・材木などの資源をもたらし、木の根や葉、樹皮も薬として病をいやすことができた。地力の低下した農地には、枯れ葉が肥料として役立った。森には、豚などの家畜の飼料となる木の実が豊富にあり、猪・熊・狐などは狩猟の対象であった。まさしく森のめぐみは、農耕における穀物生産と対をなしていたのである。⁽³⁾

また、「ケルト人」について次のような囲み説明がある。

先住のケルト人のなかには、ゲルマン人とは別の社会を維持したのもあった。

彼らの言語や文化は、アイルランド、イギリスのウェールズ、スコットランド、フランスのブルターニュなどに伝わり、現在の地域主義的主張の一つの根拠になっている。⁽⁴⁾

はっきりと「ケルト文化」、その中心となるドルイド教の説明は一切ない。かろうじて「神々と人間と妖精が交わりあうケルト神話の世界」に言及にしているに過ぎない。また、「ケルトの十字架」、キリスト教を象徴す

る十字架に丸い輪が浮き彫りされているものが紹介されている。

また、この東京書籍の世界史Bを英訳したものが出版されたので、上記の該当する部分を英文で紹介しておきたい。

Most of Europe north of the Alps was covered with forest, although the land was cultivated by Romans and vineyards were planted to the north. The Celts had settled there since the 6th century BC, and they had high level techniques for manufacturing iron weapons and ornaments. Celtic mythology, where gods, humans and fairies mingled, left deep traces to the minds of later European people. The people who lived north of the Celtic area were the Germanic.

Celtic and Germanic peoples created small villages, where they farmed and bred cattle. The forest supplied them with natural resources such as firewood, coal and lumber and also provided medicines of roots, leaves and barks. The decaying leaves became fertilizer to revitalize the weakened farmland. In the forests there were plenty of nuts, which could be used as feed for cattle such as wild pigs, boars, foxes and bears were hunted. The gifts of forest and the grain production in the farmland were both indispensable elements for them. ⁽⁵⁾

教科書に準拠して作成された全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集』（山川出版社、2016年11月）には「西ヨーロッパ世界の成立」の中で、「ケルト人」の項目がある。

ケルト人 Celts⑥インド＝ヨーロッパ語系の先住民族。居住地のドイツ南部からヨーロッパ全域に居住地を広げたが、ローマやゲルマン人

の圧迫を受け、彼らと神話や文学作品は、ヨーロッパ世界の文化形成に大きな影響を与えている。⁽⁶⁾

高等学校の教科書ではドルイド教については触れていない。しかも、ケルト人は一般的に文字をもたなかったために文献が残されていない。かろうじて、記録用の碑文等がわずかに残っているにすぎない。ケルト人の文化が現在まで大きな影響を与えていることについては触れられていない。

中学・高等学校の歴史系の教科書で取り扱うのはいわゆる政治史が中心となる。特に世界史では扱う国や地域が多いため、その国の成り立ちが重要視されているため、政治が中心となる。ヨーロッパでは政治の中にキリスト教やイスラム教が大きな影響を与えているため、文化としての宗教よりも政治的影響力としての宗教の取り扱いとなることが多い。では「ケルト」についてはどうだろうか。ケルト人の扱いについては、ローマ人やゲルマン人の以前の先住の人としての取り扱いが主となっている。ケルトの一般人は文字を持たない文化であったため、謎の部分が多いのである。神官に相当するドルイドへの言及もなく、ドルイド教、ケルト文化については世界史という大きな枠組みの中では、取り扱いはない。

3 大学でのケルトの取り扱い

(1) 大学の講義

筆者がケルト人、ケルト文化に関する内容を扱うのは「英米文学史」「英書講読」「ポップカルチャー論」の3つ授業科目である。実際にはケルト人を扱うのではなく、ケルト文化を扱うことになる。

「英米文学史」では文字通り、イギリスとアメリカの文学、また、その背景として英米史、英米文化史に触れることになる。イギリス文化の

源流がケルト人によって作られ、特にドルイド教を中心にしたケルト文化の影響が大きいことは触れなければならない。映画でも有名になったハリー・ポッターシリーズ、ピーター・パン、『ナルニア国物語』シリーズ、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズ（*The Lord of the Rings*と原題では *the Rings* と複数となっているが、邦題では単数のリングとなっているが）といった魔法や妖精はまさにケルト文化の象徴的な内容でもある。英文学をふれる際にはこうしたジャンルを無視して進めることは到底できない。このため、ケルト文化、あるいはドルイド教についてある程度の時間を割いて説明することが必要である。また、学生の理解を深めるためにレポート課題を課すこともある。

また、アーサー王伝説ともなれば、ケルト文化的要素とキリスト教の融合などもある。いわゆる多神教の文化圏に一神教が流入した場合には融合が起り易いことも重要な内容である。多神教の文化圏は変化や容認がしやすい。これとは反対に一神教は排除することが一種求められるため、対立が起きやすいのが一般的な考え方である。

「英書講読」では実際の英米文学の作品を原文で読む授業科目となっている。ここ数年は英文学ではオスカー・ワイルドの童話を取り上げている。ワイルドの童話はケルト文化の背景に、自然、精霊などを強く感じさせるものがあり、ケルト文化を知ることでその理解度は高まることが期待される。

「ポップカルチャー論」では直接ケルト人、ケルト文化、ドルイド教を扱うことはないが、若者文化としてイベントとしての「ハロウィン」や「クリスマス」を扱うことになる。その時、もともとは宗教的な意味合いのあった「ハロウィン」や「クリスマス」が、おもにアメリカを経て、日本で定着した際にイベント化という変容のプロセスを分析することになるが、その宗教行事として原点を辿ることになる。「ハロウィン」や「クリスマス」を単純にキリスト教の行事として説明することはできないのである。その背景にはケルト文化としての祝祭行事がキリスト教

の祝祭行事へ融合されていく過程があるからだ。本来、排除の性格の強い一神教の宗教行事がなぜ他の宗教の要素を取り入れるようになり、ヨーロッパからアメリカへ、そして日本に入ると宗教的要素は全く消え、今では季節のイベントとして定着している。それは若者を中心に拡大し、いまや経済効果の面でもクリスマスとハロウィンは2大イベントになるまで成長を遂げた。特にハロウィンはコスプレだけが特化された形で独自に流行り、ハロウィンと再び合体して、大イベントに成長した。

2015年は特にインターネットをはじめ、マスコミでハロウィンを取り上げることが目立った。J-CAST ニュースでも次のように報道された。

日本記念日協会・記念日文化研究所によると、2015年のハロウィンの市場規模（推計）は前年比11%増の約1220億円。14年のバレンタインデー市場（約1080億円）を上回り、11年の560億円からわずか4年で倍増した。⁽⁷⁾

ハロウィンもそうであるが、行事や記念日の本来の成立の経緯を知るとは、現行の行事の変容のプロセスを知る上でも重要なことである。

（2）ケルト文化・ハロウィン・クリスマス

〔1〕ケルト文化

イギリス文学やイギリス文化を考える際、キリスト教がイギリスに布教される以前の状態を考えることはイギリスの原点に遡ることになる。これは日本において仏教が伝来する以前の日本文化を考えるのと同じことだ。

この意味でケルト文化について取り上げることはイギリス文化の根源に触れることになる。その後、キリスト教が布教されるようになると、一部のものがキリスト教文化に塗り変えられたり、あるいは融合される。

アーサー王伝説などはその典型と言われている。鶴岡真弓・松村一男『図説ケルトの歴史』(1999)では次のようにしている。

「ケルト」を最低限定義してみると次のようにいえるだろう。

言語学的・考古学的に証明されてきた、ケルト文化のおおもとにある「ケルト(人)とは、紀元前 6000 年頃に古代ギリシア人が、西方ヨーロッパにいる異民族を「ケルトイ」と呼んだことに由来する名称で、それはケルト語を話す文化集団の意味であり、人種のことではない。「ケルト」とは言語・考古・神話・美術などから再建されうるヨーロッパのなかの不可思議な「異質」ではなく、明らかにヨーロッパを形成した多くの文化要素のひとつであったことは確かである。⁽⁸⁾

ケルト文化はケルト語を話す人々によって形成された文化である。しかし、民族としてケルト民族という単一民族がいたわけではない。ケルトについては「大陸のケルト」と「島のケルト」と大別される。「大陸のケルト」は中央ヨーロッパを中心に紀元前 7 世紀から 3 世紀にかけて部族ごとに独自の支配体制を確立していたと言われている。その起源はハルシュタット文化という鉄器を用いた文化に由来すると言う。サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳『図説ケルト』(2000)ではケルト人の足跡を知る手がかりについて次のように簡単にまとめている。

鉄器時代とローマ時代の古代ケルトに関する証拠は、史料、言語的証拠、考古学的証拠の 3 つに大別される。それぞれが互いに補う情報を与えてくれるので、それをもとに初期のケルト社会の全体像を作り上げることができる。⁽⁹⁾

クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』(1994)によれば、次のように述べている。

青銅器時代と鉄器時代を合わせて「原史時代」と呼ぶ。古代ギリシアの古典期にあたる時代である。「青銅器時代」「鉄器時代」という分類は、古代社会の技術革新の流れに沿った便利な呼称で、素材とその主たる用法の分析から 19 世紀に名づけられた。当時の学説では、青銅器時代から鉄器時代への移行は急激に起こったとされていた。しかし現在では、それは漸進的に起こり、以降の仕方も共同体ごとにかなり差があったと考えられるようになっていく。

また、BC13～8 世紀に東方から侵入してきた「骨壺葬文化人（火葬の習慣をもつ人々）」が、原ケルト人であるという有名な説も現在では否定されている。新石器時代にまでさかのぼる存在かどうかははっきりしないが、ケルト人が青銅器時代すでにヨーロッパに定着していた民族の末裔であることは、定説として認められている。BC13,12 世紀。青銅器時代末期の墓には、その後のケルト王族の盛大な埋葬儀礼の先駆けとなるものがある。⁽¹⁰⁾

ケルト人のルーツについてサイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳『図説ケルト』（2000）によれば次のように説明されている。

ケルト人 Celts はヨーロッパ史上、いや、先史時代も含めて、屈指の一大民族である。ローマが世界を制覇するはるか以前から、ケルト語を話す人々は広大な地域にわたり言語、習慣、芸術、文化など多くの共通の結びつきをもって存在していた。ケルト人はブリテン島やアイルランドだけでなく、スペインやフランスからドイツ南部、アルプス地方、ボヘミアまで、のちにイタリア、バルカン半島、そしてトルコ中部にも住んでいた。

ギリシア人やローマ人がケルト人を恐らく危険な未開人だと描いているが、書き言葉をもたない古代ケルト人は、ギリシア・ラテン時代

〔原語は Classical world だが、この語をギリシア・ローマ・エトルリアとその時代の文化を総称したものとして使用する〕の作家が残したそうした偏ったケル人像を是正する典拠を後世に残すことができなかった。しかし、今日、考古学が彼らの残した遺物を通して彼らに語らせてくれるようになった。ケルトの社会、経済、宗教について、残っているギリシア・ラテン時代の史料には出てこないことを現代の考古学が明らかにしてくれたものは多い。(11)

フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルトー生きて
いる神話』(1993)ではハルシュタットについて次のように述べている。

ハルシュタット。ケルトの過去に関するこの最初のまとまった発見は、ヨーロッパの古地図を塗り替えた。ここで鉄器時代の暮らしぶりを示す数々の発掘がなされる前は、<文明>と言えば、ヨーロッパでは主としてギリシア・ローマを指していた。長いあいだ、好古家たちは古典期の書物にはほとんど全幅の信頼をおいていた。そこに書かれてあるということが、最終的な権威の拠り所だった。それ以外の文化的資料には、けっして同等の意義や価値は与えられず、ましてや、文盲の野蛮人の文化など問題にもされなかった。しかし、いまや、<ギリシアの栄光、ローマの威風>の前に、衆目の認めるライヴァルが出現した。それが、富と秩序を備えたケルト文明だった。(12)

サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳『図説ケルト』(2000)の「ケルト人の概観史」としてその初期について次のように述べている。

ケルト人は前 500 年頃に初めて歴史の舞台に登場するが、その頃にはもうアルプス地方の大半、その北部に隣接する地域、フランス中部、スペインの一部まで広がっていたようだ、従来より、これらの初期ケ

ルト人はヨーロッパ鉄器時代の文化で、考古学的に実証されているハルシュタット文化の一部と関係があるとされている。発掘調査によって見つかった華麗な副葬品を納めた墓は、数多くの防御壁を伴っていることからしても、首長もしくは上層階級のものと推定される。⁽¹³⁾

原聖『ケルトの水脈』(2016)によれば、次の通りである。

一八四三年から一八六三年にかけて、オーストリアの考古学者ラムザウアーは、ザルツブルクに近い岩塩鉱ハルシュタットで、大規模な墓地の発掘を行った。一〇〇〇ヶ所にのぼる墓地から、武器、装身具、壺など二万点が出土した。「ハルシュタット文化」と名づけられたこの文化は、前五世紀中頃、ギリシアの歴史家ヘロドトスが『歴史』に記した「ケルトイ（後にケルタイ）」、すなわちケルト人のものと同定されたのである。⁽¹⁴⁾

過去に係るものについては、いわゆる考古学上の新しい発見があれば、これによって歴史の修正が行われることがある。その意味でも新しい研究に注目することが必要である。

「島のケルト」はローマ帝国がブリテン島を征服する以前にはすでに鉄製の武器を持っていた。大陸のケルトがブリテン島に渡ったのではないとも言われたことがあったが、現在の遺伝子研究によれば、大陸のケルトと島のケルトには遺伝的には関係がないとも言われ、謎が深まっている。島のケルトのどのように鉄器の文化が伝来したかが不明である。つまり、ケルトはイギリスやアイルランドの原点を知る上で重要な役割を果たすことになる。フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルト—生きている神話』(1993)では次のように説明されている。

ローマに征服される以前のブリタニアのケルト人は、大体のところ、ヨーロッパ大陸のケルトと同じであった。ブリタニアは何百年ものあいだケルト人を受け入れてきた。最初は小さな部族が渡ってきた。それがやがて大規模な移民の波となっていったらしいことは、ユリウス・カエサルの次の言葉からもうかがえる。「ベルガエ族の入植者たちがやって来て、略奪し、戦を仕掛けた」。紀元前 55 年、カエサルが無駄足とも知らず上陸したとき、ブリテン島にはスコットランド、ウェイルズを含め、多くのケルト部族が住んでいた。ブリタニアの住民の 3 分の 2 がケルト人であったようである。彼らは南から南西にかけての海岸部に集中していた。ケルトの大きなコミュニティは、その他、ブリストル海峡沿岸、イースト・アングリア、北ウェイルズ、カンブリア及びノーサンブリアにあった。⁽¹⁵⁾

クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』(1994)の「ブリテン諸島のケルト化」では次のように述べている。

BC5 世紀。テムズ河流域に大陸のケルト人が初めて移住した。この一帯では、鞘に装飾を施した短剣や、マルヌ人の工房で作られたフィブラなど、同時期のシャンパーニ地方のものときわめてよく似た遺物が見つかっている。現在のベルギー辺りから来たケルト人たちは、ブリテン諸島をケルト化していく。⁽¹⁶⁾

高神信一「ケルトの再考」(2011)では次のように説明されている。

ケルト人は紀元前 1200 年頃に登場し、ローマ人やゲルマン人によってヨーロッパ大陸の西部に追いやられるまで、中央・西部ヨーロッパを支配したといわれる。ケルト人がいつアイルランドにやってきたのかについては定かでない。従来の説では、勇猛なケルト人が大挙し

てアイルランドに侵入し、先住民を征服したとされていた。ところが、このことを裏づける考古学的資料はみつかっておらず、それにかわって2つの説が考えられるようになっていく。

1つは、少数のケルト人が先住民を征服したという説である。もう1つは、征服といった「暴力的な事件」が起こったのではなく、ケルト人の文化が長期間にわたって、先住民の間に浸透していったという説である。だが、いずれの説をとるにしても、ケルト文化はアイルランド先住民の文化の影響を受け、アイルランド固有のケルト文化に変容した。その証拠にアイルランド語のなかには、ケルト語を起源としない、数多くの言葉が存在している。⁽¹⁷⁾

原聖『ケルトの水脈』(2016)では「ケルト人はブリタニア島に移住したか」では次のように述べている。

古代研究はその時代状況を反映する。ケルト学は後でみるように、一九世紀初頭以来の長い歴史を持っているが、一九六〇年代のケルト学研究においては、侵略・侵入によって新たな文化がもたらされるという議論が主流だった。これは当時の植民地主義の論議を反映するものだった。この当時、鉄器時代とケルト文化はほぼ同一視されていた。七〇年代にはいってこれが疑問視されるようになり、ケルト文化をハルシュタットやラテーヌともイコールで結ばれない考え方が広まるようになった。

これ以降の新しい考古学では、文化の拡充・転移を単に人の移動だけでは説明せず、交易や戦利品、首領、職人、捕虜、奴隷などごく少数の人々の移動といったさまざまな可能性を考慮するようになった。こうした中で、紀元前一千年紀のケルト人のブリタニア諸島への移住が懐疑的にみられるようになった。⁽¹⁸⁾

続けて、「最初のヨーロッパ、ケルト人」について、1991年の展覧会に触れ、次のように述べている。

1991年、イタリアのベネチアで「最初のヨーロッパ、ケルト人」と題する大展覧会が開催された。文字通り、ケルト人をヨーロッパ最初の集団と考え、その文化を検証する企画である。半年間の開催期間中の入場者は100万人を超えたともいわれ、古代ケルト人の文化的な豊かさを一般の人々に視覚的に訴えかけることになった。

主催者による図録の序文によれば、「最初のヨーロッパ」がこの展覧会のキーワードである。ヨーロッパがどこまでか必ずしも明らかでないまま広がろうとしているが、時代をさかのぼると、いっぽうではローマ文明とキリスト教に、もういっぽうではケルト人に行きつく。この文化がヨーロッパに残した遺産をだれも否定することはできない。この展覧会は、こうした文化を引き継ぐ、新生ヨーロッパへの賛辞である」（フェリシアーノ・ベンヴェヌティ、パラッツォ・グラッシ美術館館長）。⁽¹⁹⁾

まず、「ケルト」というその名称について注目しておきたい。「ケルト」という言い方は昔からあるものではないという。ケルトイとガラタイという言い方があり、これはケルトとガリアのことであり、同義語としてある場合もある。ケルトイはケルタイと言われることもあったようだ。ガリアといえばカエサルが思い出される。サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳『図説ケルト』（2000）では次の通りである。

「ケルト」という用語の語源については、確かなことはわかっていない。ケルトに言及した記述で、現在残っている最古のものはギリシア・ラテン時代の著述家の著作である。そうした著作には、ギリシア人が「ケルトイ」とか「ガラタエ」と呼び、ローマ人が「ケルタエ」

とか「ガリーGallie」と呼んでいた人々について事実や憶測をまじえて記されているが、その記述には一貫性がなく、不正確だ。実は、ギリシア・ラテン時代の著述家たちは古代ブリテン人やアイルランド人をケルト人として記していない。彼らをケルト人とみなす今日の通念とは反するので、この事実にはいささか驚きを禁じえない。2000年前、「ケルト」という用語は、厳密にいうと、ヨーロッパ大陸住む人々を指していたのだ。鉄器時代のアイルランドやブリテンに住んでいた人たちをケルト人だとする考え方が一般に通用するようになったのは、17世紀と18世紀のことで、言語学の分野における初期の研究成果によるものであった。⁽²⁰⁾

川成洋編『イギリスの歴史を知るための50章』(2016)の木村正俊「ブリテン島のケルト人」では次の通りである。

紀元前1000年頃までに、おそらく中央アジアの草原地帯から移動してきたと思われる騎馬文化と鉄器文化を携えた民族集団が、ヨーロッパ大陸中央部に定住した。古代ギリシャ人から「ケルトイ」、古代ローマ人からは「ケルタエ」と呼ばれた「ケルト人」である。(ただし「ケルト人」という用語は近現代になってから使われるようになった)。ケルト人はまとまった単一の民族ではなく、多様な民族の混成集団であったとみられる。やがて彼らはイタリアやスペイン、小アジアなど四方八方の地域に拡散し、ケルト人の居住地は広大な範囲に及んだ。⁽²¹⁾

原聖『ケルトの水脈』(2016)によれば以下の通りである。

カエサルの『ガリア戦記』では、ガリア人の一部がケルト族である。ただしイベリア半島のケルト族はガリア人ではない、という言い方も

している。カエサルらローマ人はガリアの人々をさしてガリア人と呼ぶが、彼ら自らはケルタエという自己認識をもっていたことがここでは関係するだろう。

前1世紀のストラボンが、『地理書』で、「ナルボネンシス地方〔ガリア南部〕は、昔の人はケルタイと呼んだが、このケルタイに基づいて、ガラタイ全般をケルトイと呼ぶようになった」と記している。

16世紀以降の近代になると、フランスではケルトとガリアが同義語として用いられ、イギリスではガリアの一部がケルトだと認識された。

(22)

ケルト人が『ガリア戦記』に登場するということは戦士としても優秀であったということだろうか。

傭兵の時代

前四世紀にはイタリア侵入があり、その一世紀後にはバルカン半島への大遠征があった。これはローマの歴史家などによる文献がものを言っていて、いわゆる歴史的ケルト、ラテーヌ文化の拡大を物語る事件として叙述されてきた。さらにヨーロッパ各地への移住が続いたと解説されるのである。いずれにしても文献史料にケルト人という名前が登場しはじめてまもなく

の、この前四世紀から前三世紀にかけてが、ケルト人の全盛期といえる時代である。

ケルト的世界の拡大は、傭兵としての進出だったという解釈がある。

(23)

さて、ケルト文化の特徴はドルイド教に代表される。インターネット上の「ケルト文化 アイルランドにみるヨーロッパの源流」によれば以下の通りである。

ケルトを知る上で重要となってくるのが、キリスト教が普及する以前から彼らが信仰していたドルイド（Druid）教です。この土着の信仰では、太陽と大地の古い神々を信じ、あらゆる生き物の中に霊的な存在を見いだしていました。つまり「自然」と「宇宙」と「自己」を一体化する思想であり、ここから「靈魂不滅」や「輪廻転生」などの考え方が形成されていったと考えられています。これらの思想は、日本人にも馴染みの深い自然一体化思想ともいえるでしょう。実際、ケルトの神話や伝説では、人間が動物に生まれ変わったり、神が英雄になったり、英雄が妖精と結婚したり、妖精が人間の子供を産んだり、神、人間、妖精がめまぐるしく入れ替わり（転生）しています。⁽²⁴⁾

原聖『ケルトの水脈』（2016）には火、水、木への愛着としてまず、「聖ヨハネの火」として次のように説明している。

太陽が全能神であり、地上におけるその象徴が火である。かまどの神としてギリシアではヘスティア神、ローマではウェスタ神が知られているが、「ドルイド」と呼ばれるケルトの祭司たちは、太陽賛美の儀式を夏至の日に行ったという。これがキリスト教によって、六月二日の夏至の日から、二四日の聖ヨハネの日の宵祭りの火に置き換えられ、続けられることになったと各地でいわれている。古代ゲルマンの夏至祭りの変容系とみるむきもあるが、キリスト教以前の夏至祭りが火祭りとして祝われていたのは確実であり、その背景を提供する異教の神々の多さを見ても、これも民間信仰的な太陽神信仰の名残と考えたほうがよさそうだ。⁽²⁵⁾

ケルトには水に対する信仰もある。

水は人間にとって不可欠であり、泉谷や川が信仰の対象となるのは当然のことといえる。従来はブルターニュにおける泉の信仰はケルト起源で、それがキリスト教化されると喧伝されてきたが、この言い方は正確とはいえない。少なくともケルト起源ではないものは、多数に上るであろう。(中略)

キリスト教自体が、洗礼や奇跡の泉など、水に対する信仰を持っているので、それ以前の信仰がどの程度反映しているのか、見極めるのは非常に難しい。⁽²⁶⁾

水と同様に木についても愛着があると言う。

英国の民族学者フレーザーは、名著『金枝篇』(一八九〇年初版)のなかで、「樹木信仰」の事例としてたびたびケルトのドルイドに言及した。樹木が重要な崇拝の対象だったこと、とりわけオークに寄生するヤドリギが神聖だったことは、一世紀ローマの博物誌プリニウスが記している。⁽²⁷⁾

ケルト社会ではドルイドという司祭が人間と神々の仲介者であった。クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』(1994)によれば次の通りである。

知的エリートであるドルイドは、文学と詩に秀で、貴族の出身であり、特権を与えられ、税と兵役を免除されていた。しかし 20 数年を修行、つまり聖なる言葉の暗記に捧げなければならなかった。聖なる言葉を文字に写すことは禁じられていた。しかし高い教養をもっていた彼らは、カエサルの時代には「ローマ」文字を知っていた。数学に通暁し、天体の動きを学び、宇宙の大きさをさえ知っていると豪語していた。神々の世界に入りこめる唯一の人間であり、人間と神々の世

界の仲介者である彼らは、宗教儀式をとりしきり、供犠をとり行い、神託の解釈を行なった。彼らによれば、死後の靈魂は不滅で、死後、ある人間の肉体から他の人間の肉体に移動するか、あるいは「彼岸」で行きつづけるのだという。このような信仰によって人々は勇気を得、死の恐怖を乗り越えることができたのである。

通俗的絵画には、ドルイドが宿り木を集める姿がよく描かれる。これは魔術的儀式であると同時に、もっと深遠な宗教行為、すなわち季節の自然の推移にかかわるケルトの大神に捧げる祭祀なのである。多年生植物である宿る木は、宿主である樹木から見れば、肉体における魂のようなものであり、神の発露、あるいは神が植物に変身したものとさえ考えられているのである。⁽²⁸⁾

サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳『図説ケルト』（2000）では次のように述べている。

ケルト人は極端に迷信深い人々で、神々と精霊と祭司を崇めていた。彼らの生活は儀礼と禁忌によって厳しく統制されていた。自然の風景にさえ超自然的な存在がいたるところに宿っており、あちこちに祭儀のための禁域や祭殿が点在していた。

聖域はいろいろな意味でいまだに謎である。信仰そのものは考古学的な直接の証拠を残さないし、たとえばドルイドも、文字で表すというかたちで宗教的なことがらを記録することを避けた（と、カエサルは記している。）しかし、ギリシア・ラテン世界の著述家たちは、神々やドルイドのことばかりでなく、ケルトの信仰や埋葬儀式、象徴的意味や供儀などについて、ときには非常に誇張しながらではあっても、魅力たっぷりに示してくれている。それに、近年、発見された祭殿、墓地、奉納物、犠牲となったものなどの数が急増したことともに、ケルトの宗教的慣習に対する理解をおおいに深めてくれている。⁽²⁹⁾

ドルイドについては次のように述べている。

ドルイドはケルト社会では、知者、判事、予言者、天文学者、神々との仲立ちをする者として、非常に尊敬されていた。彼らは実際には唯一の神官ではなかった。ほかに、ストラボンが「予言者にして自然哲学者」と記しているウァテスのように、ドルイドほど卓越していない聖職者や予言者がいた。ケルト人は、少なくともガリア、ガラティア、ブリテンでは、女性の祭司も任命していた。(もっとも、ドルイドの女性形「ドルイデス」とは呼ばれていなかったらしい)。伝えるところによると、ローマ軍がモーナ（現ウェールズのアングルシー島）を襲撃したとき、神々の怒りを静めようとするドルイドのかたわらに女性の祭司がいたようだ。

ドルイドは謎のベールに包まれている。彼らは次の世代に教えを、文字で記したかたちではなく口承で伝えた。そのために彼らの教義は結局、彼らが絶えるとともに絶えてしまったのだ。彼らは考古学的な証跡を何ひとつ残さなかった。ギリシア・ラテン世界の史料やのちのアイランドの民話でドルイドの名は永遠に残され（しばしば想像力豊かに描き過ぎている）、数世紀前からいつのまにか増えたとつぴな神話や誤解のせいで、ドルイドの真の姿はいっそう曖昧になってしまったのだ。⁽³⁰⁾

ドルイド教の起源と伝播については次のように述べている。

ギリシア・ラテン世界の史料には、ブリテンとガリアのドルイドに関する記述はあるが、イタリア、スペイン、ドナウ川流域、ガラティアにドルイドが存在したという記述はない。カエサルによると、ブリテンでは最高の修行ができるという評判だったので、ガリアで入門し

た弟子はブリテンへ送られることが多かったようだ。実際、ドルイド教はブリテンで発達し、その後ほかの地域広まっていったのかもしれない。その分布をみると、ドルイド教がヨーロッパ大陸に伝わったのは、ガリア人がアルプスを越えて移住していった前4世紀初め以降と思われる。⁽³¹⁾

ケルト文化のドルイド教の示す世界はキリスト教とは大きく異なる。フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルト—生きている神話』(1993)では「異教とキリスト教」について次のように取り上げている。

キリスト教がケルトと同化したのか、ケルトがキリスト教を吸収したのか？西洋でキリスト紀元がようやく始まったころ、ケルトの「異教」はすでに長い歴史を誇っていた。さまざまな神が崇められ、それぞれに古代ケルト人の願いを満たしていた。神話は行動の規範だった。ケルト人は秩序を必要とした一個人として、また部族社会の一員として生きていくには、何か支えがなければならなかったのである。神話はまた、成長の道しるべでもあった。自分が今、人生のどの段階にいるのかを教え、その長い道のりで迷わないよう導いてくれるものだった。終わりが来たとき—非業の死が頻繁に起こった—、そこには何が待っているのか？死の恐怖はどうしたら和らげられるのか？彼らの神話は、こうした問いに答えてくれた。もっと日常的なこと、どのように毎日を暮らしたらいいのか、それも神話が教えてくれた。⁽³²⁾

さらにケルトの宗教については次のように述べている。

初めに土くれありき。ケルトの宗教は自然の崇拝から始まった。大地の神秘的な力。豊穰・生命・成育の源としての大地。神話では、英

雄や王は大地の女神と婚姻を結ぶ。母なる大地は、つまり、わたしたちが生まれ出て、また帰っていくところである。神々はこの地上が豊かであるように見守ってくれるので、人々から崇められた。神の座は高みにあった。岩山。連峰。天然の砦。独立峰。時には山の形が大地母神の乳房に見立てられることもあった。水の流れのきらめきにも神の存在は感じられた。水源、川水の合流するところ、そしてほの暗い湖の底。すべてに神がいた。

樹木もまた、神々の宿るところとされた。ケルト人の国では、昔から、木は信仰の対象となってきた。それぞれの部族が特有の木を崇拜し、その木を聖域に立てて祀った。⁽³³⁾

ケルト人の宗教体験については次の通りである。

ケルト人の宗教体験には、あとから取ってつけられたものが多い。何か起こったあとで、修道院の写学生は、あたかも昔からそうであったような顔をして、その出来事をキリスト教と結びつける。彼らは無邪気に考えていた。自分たちも当然、聖書に加えられてしかるべきである。そして、もともと創造の才があったから、キリスト教の伝説にケルト人がちゃっかり登場してくることになった。このように修道僧は自分たちの先祖であるケルトを忘れなかった。そのため彼らの信仰はいっぷう変わったものになった。特徴的なのは、その象徴主義的なヴィジョンである。キリスト教が入ってきたとき、ケルト人はキリスト教と古代伝説を合体させることにより、それを自らのうちに取りこんだ。そうして自分たちもその新しい構図におさまったのである。⁽³⁴⁾

十字架についても興味深い記述がある。

実際の祭祀の中心であつ生贄。かつては異教の神々に人身御供が捧げられたのだが、キリスト教とともに、それはキリストの血に変わる。自然の靈力もまだ崇められていた。ケルトの高十字架を飾る丸い輪には、太陽神ールフの面影を見ることができはしない。フルの祭を受け継ぐ巡礼行。フル信仰は、名前は変っても、クロー・パトリックの山頂でまだ生きつづけているのである。⁽³⁵⁾



(36)

前述の高等学校の教科書、尾形勇他『世界史 B』（東京書籍、2012、2012年3月検定済、2016）ではこのケルトの丸い輪のついた十字架が写真付きで紹介されていた。

続けて、原聖『ケルトの水脈』（2016）を見てみたい。まずは「多神教と一神教」について次のように述べている。

一般的にいて、民間信仰は多神教的であり、多神教は寛容である。すでにみたように、前一世紀ローマでは東方から伝播した太陽神ミトラが広く信仰され、三世紀末のディオクレティアヌス帝の頃にはローマの国教的な扱いを受けていた。キリスト教改宗前のコンスタンティヌス一世もミトラ神信仰者だったという。

カエサル時代のガリアでは、土着の民間信仰的な神々、富や技術の神テウタテス、厄払いの神ペレノス、豊穰や戦争の神エスス、天の神タラニスなどが、その属性の似たローマの神々、すなわちメルクリウス、アポロン、マルス、ユピテルとそれぞれ同一の神として信仰されていた。またアルモリカのリエドネス族では、守護神ムッロや川の神ウィシヌスがローマの軍神マルスと一緒にされて、マルス・ムッロ神、マルス・ウィシヌス神として崇められていた。まさに日本の神仏習合的な宗教観がそこにあった。民間信仰はどこでも排他的ではなく包含的である。多神教とはそうしたものである。

これに対して、一神教は非寛容であり、しばしば狂信的である。熱狂的ゆえに殉教もいとわず、それが英雄扱いされる。キリスト自身も殉教で生涯を閉じており、キリスト教は「殉教教」でもある。初期聖人伝のなかでは殉教が語られる場合がかなりある。⁽³⁷⁾

ドルイド教についても同様なことが起きてくる。というよりは、ブリテン島にキリスト教が伝播してもドルイド教が一扫されるわけではない。もともと多神教の文化で育った住民たちは2つの宗教を抱えることになり、融合等が行われることになる。では実際にブリテン島にキリスト教が到来したのはいつ頃であろうか。原聖『ケルトの水脈』(2016)によれば、次の通りである。

314年のアルルの公会議にヨークの司教などが出席しており、4世紀初頭にはブリタニアにキリスト教徒が定着しはじめていた。ブリタニア諸島出身の最初のキリスト教伝道者がペラギウスである。ペラギウスは、350年頃にマン島に生まれたという説が根強い。人間は神が善なるものとして創造したのであり、原罪はなく、人間の自由意志によって功德を積むことで救いが可能になるという説を展開して、同時代のローマのアウグスティヌスやヒエロニムスと論争したが、416年に異端として排斥された。2004年に公開された映画「キング・アーサー」のなかではアーサーがペラギウス派として描かれている。⁽³⁸⁾

人間が死んでから後に赴く世界が存在する、という思想は人類に普遍的である。それが幸福の国であるか、それとも不幸なる世界もあるのか、そのあたりは宗教観によって異なる。

欧州ではキリスト教伝来以前の死生観を表現すると思われる神話が、ギリシア・ローマという古典世界と、ゲルマン・ケルトという異教の民について伝わっている。後でみるように、ケルト人の世界にはギリ

シア・ローマから移入された神々も多い。おそらくは、たとえば仏教と神道の関係を合理的に説明する本地垂迹という思想が不必要なほど、前提となる文化が類似していたためかもしれない。その場合は、たとえば言語的類似性、インド＝ヨーロッパ語族という同族性ゆえの形、ないしは普遍的な自然信仰の形として説明が可能である。

いずれにしても、ギリシアとローマの神々の相互対応関係、ローマとケルトの神々の相互対応関係などから考えても、ギリシアとローマ、ゲルマンとケルトが、別箇の信仰形態をとっていたと考えるより、近接しあったものだったとみるほうがわかりやすい。それは本書でみるように、ケルトの祭司ドルイドの位置づけにも関係し、従来の学説の修正を迫るものにもなるのだが、こうした古代世界にキリスト教が入り込んで、人々の世界観、死生観に変化が生じた。すでに見たように、火や泉に対する信仰には、キリスト教以前の信仰が反映していると考えられる。⁽³⁹⁾

また、妖精等については次のように述べている。

欧州の妖精、小妖精、コビト、巨人などは、日本の妖怪に比較することができるのであり、ブルターニュではまさにおびただしい数の妖精たちとの交渉譚が記されている。この種の記録はキリスト教とはまったく無縁の精神世界である。おそらくこうした精神世界に、キリスト教伝来以前の信仰形態が垣間見られると考えられる。

コリガン、または異界

異界とは、人間の住む世界とは違うもう一つの世界という意味である。したがって人間が死後に赴くキリスト教的な地獄や天国はない。異界に暮らす人々の生態は人間とよく似ており、おきおり人間界と交錯する。多くの場合、人間界に出没する場所が決まっている。妖精、コビトなどがこうした異界の住人である。⁽⁴⁰⁾

総じてケルト文化についてまだわかっていない者が多く、これはドルイド教が伝承を中心にしたものであったためである。文字を使用することがなかったことが大きな原因だ。しかし、全く文字を使用していなかったというわけでもなかった。

よく言われてきたことだが、ギリシア人、ローマ人と異なり、古代のケルト人は文字使用をあまり受け入れなかった。なぜかといえば、書きことばを受容するほど文化程度が高くはなかったというより、彼らの宗教観、世界観がそうさせたというのがこれまでの見解だったが、フランスの古代ケルト語学者ランベールは、ケルト人が文字使用を忌避したという見解にはむしろ懐疑的である。そうなると、文字を嫌ったとされるケルトの聖職者ドルイドについても、これまでの見方を改める必要性が生じる。

ローマ人の興隆以前、いまのイタリア中部トスカナ地方を中心に、前七世紀に最盛期を迎えたエトルリア人の文化は、フェニキア系の文字を受け入れて、一万点あまりの墓碑銘などの碑文を今日まで残した。もともとこのエトルリア語自体はほとんど解読されていない。印欧語でないことは確実視されているが、固有名詞以外判読にいたっていないのである。⁽⁴¹⁾

ケルト人は固有のアルファベットのような文字を持っていなかったが、借用したアルファベットを用いて碑文を刻んでいた。クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』(1994)でも次のように述べている。

ケルト人は単一民族ではなく、複数の民族からなる一集団であり、もっと正確には、複数の社会からなる一集団である。言語はそうした社

会のもっとも明確にして正確な特徴のひとつである。(略)したがって、ケルト人とは、ケルト語派のいくつかの方言をかつて話し、今日も話している集団であると言うことができる。ケルト人は、自分たちが住んだ場所に、地名と人名を刻んだ碑文を残し、こうして歴史にははっきりした、共通の記憶を残したのである。わずかに名残をとどめているケルト語の方言が、かつてその場所に、ケルト人がいたということを実証している。こうした形跡によって、ケルト人の領域と絶えず移り変わっていた境界線を、少しも迷うことなく画することができるのである。⁽⁴²⁾

また、インターネット上の「British Highland」では次のように説明している。

『大陸のケルト』『島のケルト』を問わず、ケルト語を話す民族に共通して見られるのが、ドルイドという司祭を中心に作られた宗教で、ケルトの世界観を代表するものです。ドルイドは『大いなる知恵者（樫の知恵を持つ者という説もあり）』という意味で、頭からつま先まで白い衣に身を包み、自然の持つ霊的な力を信仰していました。ドルイドは文字による伝承は行わず、詩や、宗教観、自然学、倫理学に関する全ての知識を口頭による伝承で記憶しなくてはなりません。ですから、ドルイドになるには大変な修練が必要で、全てをマスターするのに長い者では20年間かかったと言われていました。ドルイドは宗教的指導者であると同時に、政治的な指導者でもあり、又様々な争い事を調停したりもしました。

ドルイド達は、この世を絶え間ない生成的の変化の産物と捉え、現世というのは、靈魂が意識を通じて感覚する一過性の経験であると解釈しました。また、靈魂は不滅であり転生し、地下（別次元？）には別の世界が存在すると信じられていました。“人間は目に見えない靈の力によ

て支配され、全てを司るこのダイナミックな力が生命を転生させていく”とされるケルト人にとって、死とは永遠に長い生の一時的な通過点に過ぎないという考えが生まれます。そしてその結果、死を恐れない、恐るべき勇敢さを持った戦士が生まれていったようです。紀元前 3 世紀、ギリシャの聖域デルフォイのアポロン神殿に侵攻したケルト人の武将が、ギリシャの神像が人間の姿をしているのを見てあざけ笑ったといひます。⁽⁴³⁾

鶴岡真弓・松村一男『図説ケルトの歴史』(1999)ではケルト全般を次のように定義している。

中世諸国に流布したアーサー王伝説に満ちている「魔術」や、北方ルネサンスの画家デューラーが描いた全身緑色の「森の人」の姿や、19世紀の詩人ハイネが「流刑の神々」と呼んだ妖精といった想像力の産物は、キリスト教とギリシア思想だけでは説明できない。「ケルト」文化はこの説明できない要素を多分に担っている。たとえばケルトの神話には、妖精や異界の存在の不思議な力によって、この世界がつねに「変化」にさらされているという驚異の物語が満載だ。⁽⁴⁴⁾

最後に一般的な定義として新村出編『広辞苑』(2018、第7版)の定義を紹介しておきたい。

ケルト【Celt】

紀元前 5～前 1 世紀、ヨーロッパの中部・西部に広く居住した民族。やがてローマの支配下に入り、また、ゲルマンの圧迫により次第に衰退。現在はアイルランド・スコットランド・ウェールズ・ブルターニュなどに散在する。妖精伝説や多くの民話・神話で知られる。⁽⁴⁵⁾

ケルト文化については元来書きことばをもたず、碑文などからその一端から徐々にケルト文化のことが分かるようになって来たが、今後の考古学の発見等によりさらにその解明が進むことを期待したいが、ヨーロッパをキリスト教文化とギリシア思想だけで捉えようとするのは大きな限界がある。特に、キリスト教以前のことを考えると、ケルト文化はヨーロッパ文化の源流と言える。

[2] ハロウィン

筆者自身子どもの頃はようやくクリスマスが定着しかけた時で、ハロウィンを周囲で楽しんでいる人はいなかった。教科書か何かで「万聖節」として表現されていたと記憶している。それが、いつの間にか「ハロウィン」として表記され、ここ数年取り上げられるようになった。新村出編『広辞苑』（2008、第6版）では次のように説明されている。

諸聖人の祝日の前夜（10月31日）に行われる祭り。スコットランド・アイルランドに起源を持つアメリカの祝い。⁽⁴⁶⁾

この時の定義では「アメリカの祝い」としているが、これは当然誤りである。では第7版（2018）では次のような定義に訂正されている。

諸聖人の祝日の前夜（10月31日）に行われる祭り。スコットランド・アイルランドに起源を持つ収穫祭で、魔除けの意味を持つ。⁽⁴⁷⁾

「アメリカの祝い」は収穫祭、魔除けという内容出て修正された。一般的にハロウィンは次のように説明できる。

諸聖人の祝日の前夜（10月31日）の祭り。秋の収穫を祝い悪霊を追い

出す古代ケルト人の祭りが起源。米国では、ジャック・オ・ランタン（カボチャの提灯(ちょうちん)などを飾り、仮装した子供たちが近所の家々からお菓子をもらう。ハロウィン。⁽⁴⁸⁾

ケルト文化から生まれたハロウィンであるが、タッド・トレジャ／北村弘文訳『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』（1992）では次のような説明がある。

サムヘインの祭りは、古代ケルト人の新年の祭りで、この時期には人間や動物のいけにえが死者のサーマンと呼ばれる主や太陽にささげられた。11月1日に祝われるサムヘインの祭りは、こんにちの万聖節の前夜祭（ハローウィン）の原型である。しかし、同時に現代の祭日は中世の聖職者、とくに8世紀に11月1日をキリスト教の聖人の祭日に選定した法王グレゴリオ3世の影響を反映したものである。ただ現在われわれが10月31日に祝うのは、万聖節の前夜祭、すなわち「ハローウィン」としてである。

この日に示される魔女や死者に魅せられた状態は、異教とキリスト教両方の祭日に逆上ることができるが、「いたずらかお菓子か」という世俗的な慣習も、おそらくそうであろう。

ロバート・マイアーズは、死者にご馳走をささげた後、「死者の魂を象徴する仮面と時代衣裳を着けた村人たちが郊外までパレードして亡霊たちと外へ連れ出す」サムヘインの祭りがこの習慣の源だとしている。

キリスト教徒のその後の貢献は聖人の遺品が展示されたり、教区民たちがそれぞれ好きな聖人の衣裳を着けたりして行われた中世の万聖節の行列の中に見られる。⁽⁴⁹⁾

また、荒このみ監修『[新版]アメリカを知る事典』（2012）の岡田康男「ハ

ローウィーン」には以下のような説明がある。

10月31日の夜に行われる年中行事。古代ケルト人のサムハイン Samhain 祭が起源といわれる。これは死の神サムハインをたたえ、新しい年と冬を迎える祭りで、この日の夜には死者の魂が家に帰ると信じられた。キリスト教の伝播にともない、この祭りはキリスト教にとりこまれ、諸聖人の祝日である万聖節（11月1日）の前夜として位置付けられた。Hallow とはアングロ・サクソン語で<聖徒 saint>を意味し、All Hallows Even（万聖節前夜祭）がつつまって<Halloween>となった。今日ではアメリカ合衆国の子どもの祭りとして有名である。アメリカでは、この夜のため、大きなカボチャをくり抜き、目鼻口をつけた提灯 jack-o'-lantern を作り、窓際に飾っておく。学校では仮装パーティなどが開かれるが、夜になると景物、魔女、海賊などに仮装した子どもたちが、隣近所の家々を回ってごちそうしないと、いたずらをするぞ Trick or treat!>と言いながら、チョコレートやキャンディをせびっていく。⁽⁵⁰⁾

また、サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』（2000）ではその起源について次のように専門的に説明している。

多くの神は三幅対として信仰されていた。つまり、1つの神に3つの面があるとされ、ときには3つの顔をもつ神として描かれた。自分の姿を変えることができ、さまざまな動物の姿を自在にとることのできる神もいた。少なくともアイルランドの神話にはそうした神が登場する。たとえば、戦場で死者にたかり死肉を食うワタリガラスは、アイルランドでは戦争の女神の化身を考えられていた。ルーマニアのチウメスティから出土した兜を飾る鳥も時代はもっと前だが、ケルト世

界のもう一方の端で同じような意味を表していたのであろう。

ケルト人にはどうやら、生きているあいだの行為に対する褒美や罰としての天国とか地獄といった概念はなかったらしい。来世に生まれ変わるの当然のことと考えていたようだ。ケルトの戦士の特徴として、死を恐れなかったようだが、その理由はある種の「ヴァルハラ」〔北欧神話において、戦士した英雄が迎えられるという殿堂〕信仰にあったと考えれば説明がつく。生者の世界と神や死者の世界との境界があいまいで、サウインの大祭のときにはその境界がすっかり消えてしまったようだ。（これは夏の終わり、冬の始まりを示す11月1日におこなわれる祭りで、祭りのあいだこの世の正規の法が一時的に破られて、混沌と化すのである。この名残りがハロウィンとして今日に伝えられている。）アイルランドの神話では、生者の英雄が死者の王国を訪れるという。⁽⁵¹⁾

高等学校の教科書『世界史B』では「ハロウィン」の記述は全くない。ローマ人やゲルマン人の先住人として言及されるにすぎなかったケルト人の文化（ドルイド教）の祝祭行事が現在では意味を変えて、日本でも第イベントとして定着していることを考えるとケルト人の文化は現在の日本でも形を変えて生きていることになろう。

[3] クリスマス

日本で行われている街中で見かける一般的なクリスマスは、宗教色のないイベントしてクリスマスである。企業等の商品の宣伝や売り上げアップを狙った戦略的なイベントになったと言っても過言ではない。ここではまず「クリスマス」の本来の意味とその後、特にアメリカでの変容、そして日本でのクリスマスについてポップカルチャーの観点から取り上げてみたい。

現在、日本で行われているイベントは西洋起源のものが少なくない。それもやはりアメリカの影響が強いかもしれない。しかし、アメリカ発祥ではない。中屋健一編『アメリカ入門 12 講』（1982）の中村美子「アメリカ人とは何か」の中で次のような文章がある。

18 世紀後半から、1810 年代まで、ヨーロッパ・アメリカ双方の情勢不安定のため、移住者の数は少なかったが、1814 年のナポレオン戦争終了後、しだいに増大した。19 世紀後半までの移住者の中で、一番多く大西洋を渡って来たのは、ドイツ人であった。ドイツ系移民は、比較的経済的に余裕のある者が多く、中西部に行って、農業を営んだり、都市の発展に尽くした。中には、政治的亡命者、頭脳流出者が含まれ、アメリカの文化・教育の面で大いに貢献している。クリスマスやイースターの行事、たとえば、クリスマスツリーやイースターの卵ころがしなどは、その起源はドイツである。アメリカの食生活でも、ハンバーガー・フランクフルトソーセージ・ライ麦パン・塩づけキャベツ、その他多くのものが、ドイツ人によってアメリカ全土に広められた。⁽⁵²⁾

荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』（2012）の岡田康男「クリスマス」には次のように説明されている。

キリスト降臨祭。12 月 25 日。アメリカのクリスマスは、各国からの移民がもたらした風習と、アメリカで生み出された行事が入りまじって、きわめて多彩で華やかである。ピューリタンはにぎやかな祝祭を嫌ったが、南部では植民地時代からクリスマスが祝われた、独立戦争期にドイツ人がもたらしたクリスマス・ツリーは、19 世紀中葉以降一般化し、クーリッジ大統領の時代（1923-29）にホワイトハウスの庭にも飾られるようになった。クリスマス・イブに、サンタ・クロース

とトナカイが家々を訪れる情景は、<'Twas the night before Christman>で始まるムーア Clement C. Moore (1779-1883)の詩(1822)によって描かれた。ダッシャー Dasher、ダンサー-Dancerなどのトナカイの名も、彼の命名による。今日親しまれているサンタ・クロースのイメージは、ムーアの詩にそってナスト Thomas Nast (1840-1902)が描き、1860年代に《ハーパーズ・イラストレーテッド・ウィークリー》に載せたものである。なお、ある少女の投書に答えてサンタ・クロースの存在を説いた《ニューヨーク・サン》紙の論説(1897)は、アメリカ人のだれもが知っている文章である。⁽⁵³⁾

ここでクリスマスの起源についてあらためて確認しておきたい。

クリスマスとは何かを新村出編『広辞苑』(2018年、第7版)の定義をまず引用しておきたい。

(Xは「キリスト」のギリシア語表記の頭字。masは祭日の意)キリストの降誕祭。12月25日に行う。ミトラ教の太陽神の新生を祝う「冬至の祭」をキリスト教が取り入れ、利用したものとされる。聖誕祭。降誕祭。ノエル。⁽⁵⁴⁾

一般的にクリスマスを考える場合には次のことに注目されるのではないだろうか。

- 1 12月25日(12月24日はクリスマスイヴ)に行われるキリストの降誕祭。
- 2 クリスマスツリーやクリスマスリースを飾る。
- 3 サンタクロースが登場し、プレゼントがもらえる。

まずはもう少し、クリスマスの起源について見ておきたい。

オスカー・クルマン／土岐健治・湯川郁子訳『クリスマスの起源』
(2006)の内容は以下の通りである。

第1部 クリスマスの起源

- 1 イエスの誕生日
- 2 1月6日の祝祭
- 3 12月25日の祝祭
- 4 12月25日の祝祭の普及
- 5 歴史木、神学的結論

第2部 クリスマスツリーの起源

- 1 序
- 2 枝や若木を用いてクリスマスを祝う習慣
- 3 私たちのクリスマスツリーの本当の起源

クリスマスの起源について考える時、聖書の「ルカ福音書」の降誕物語が必ず言及されるが、イエスの誕生日について記載がないということが謎の多い原因の一つである。同書によれば、誕生日説として3月25日、3月28日もあるという。⁽⁵⁵⁾ その考え方の基になるのは「創世記」の記述より、ローマ暦(ユリウス暦)などから天地創造の第1日目が3月25日、神が太陽を4日目に創造した3月28日がメシアは「義の太陽」としてこの日に生まれたとする説があるようだ。また、3月25日が受胎日として、その9ケ月は12月25日である。

さらにイエスが亡くなったのが「ネヘミヤ記」の第2章1節に「アルタシャスタ王の第20年、ニサンの月」とあるが、これは4月6日として考え、その日を受胎日として考え、9ケ月の1月6日が誕生日とする説もあるようだ。

なぜ彼らはこの洗礼の祝日を1月初旬、特に1月6日(なしい10

日)に設定したのでらう。福音書記者はイエスの誕生と同様、受洗についても日付を記していない。この日が選ばれたことについては、次のような背景が考慮されるべきであろう。1月6日には非キリスト教徒の間ではディオニュソス祭が祝われていたが、それは(冬至が終わって)昼が長くなり始めることと関連しており、さらに、特にアレクサンドリアでは処女神コレー(コレ-は「乙女」の意。ベルセポネーと同一視される)によるアイオン(時あるいは永遠の神格化)の誕生がこの日に祝われており、また、その日はオシリスに献じられた日でもあった。1月6日の前夜ナイル河の水は、特別の奇跡を行う力を持つとされていた。このような背景に照らして、バシレイデス派が、キリスト洗礼の祝日をこの日とすることによって、異教徒に対して、キリストこそが地上に現れた真の神的存在であり、彼はヨルダン河で「あなたこと私の愛する子」という声が響いた瞬間にこの地上に来臨したのである、ということ宣言しようとしたことは、明らかであろう。(56)

更にややこしくしているのが、1月6日に行われたていた洗礼祭が東方の正統教会全体の習慣となった。また、同書でエジプトで発見された4世紀初頭のパピルスに1月5日/6日の顕現祭(エピファニア)の典礼文を含んでいることがあきらかになったという。つまり、洗礼とキリストの降誕にかかわるものである。当時はまだ1月5日から6日にかけてクリスマスが行われていたという。

では12月25日のクリスマスはいつからなのか。同書によれば以下の通りである。

いつ、どこで、なぜ、他ならぬ12月25日の降誕祭が行われるようになったのか。これらの間について、学者たちはまだ完全な合意に達していないが、年代は325年と345年の間、場所はローマであること

は、ほぼ確実であると考えられている。初期の顕現祭は、すでにそれ以前に東方から西方へ、おそらくローマにまで、広まっていたであろう。それを裏付ける証拠資料はないけれども、このように考えてよいだろう。いずれにせよ、ローマにおいて 336 年 12 月 25 日にキリストの降誕祭が行われたことが確認されており、恐らくすでにコンスタンティヌス大帝治下（306-337 年）にこの日が降誕祭として祝われていたものと思われる。ローマ時代の初期には、この新しい祝祭（12 月 25 日の降誕祭）が徐々に定着して行くのと並行して、初期の（1 月 6 日）顕現祭が、その元来の形のまま、しばらく継続して祝われていたのかもしれない。⁽⁵⁷⁾

12 月 25 日は非キリスト教世界の太陽神をまつる重要な日として祝われていることから、あえてこの日と結び付けてということだ。特に当時のローマ帝国で太陽を崇拝するミトラ教の冬至の祝祭日が 12 月 25 日であったことが大きな要因であるという。

さらにクリスマスツリーのことを考えるとより複雑となるモミの木自体、イエスの誕生の地ベツレヘムにはなく、イギリスやアメリカでももともとはなかったものである。同書によればストラスブルで街頭でモミに飾り付けられたクリスマスツリーが現れたのは 1605 年であったという。⁽⁵⁸⁾

インターネット上に公開されているものとして、小澤克彦（岐阜大学・名誉教授）「13.キリスト教の祭りと行事 1. クリスマス」には以下のような記述がある。

ゲルマン人（現在の西欧人）の習慣

他方、このクリスマスには「北欧の民間の祭り」も入り込んできます。その経緯ですが、キリスト教がローマ帝国で国教化してほどなく、その西域を「北欧出身のゲルマン民族」が占拠してしまいます。その

ゲルマン人は結局「ローマ教会と手を結ぶ」ことになり、キリスト教は新たな民族ゲルマン人の中に浸透していくことになりました。

そのゲルマン族も伝統的なローマの民と同じような「冬至の祭り」をもっていました。彼らは不滅のシンボルとして「常緑樹（もみの木など）」を立て、「贈物を交換」して春の再来を祝いあいました。そしてやがてこのゲルマン人の習俗もクリスマスに吸収されていったと言えます。

ですから、クリスマスは地方色を濃く反映して今日にまでおよんでいるのです。つまり、たとえば、肉をくらい、飲み騒ぐという「冬至」の祭りをもっていたところは「カーニバル」という形に発展させるし、古代ケルトのドルイド教の風習をのこしているところでは「宿り木」を軒に飾ったり、火祭りの風習のあったところではそのように、といった具合です。

今日、クリスマスというと「モミの木」が飾られますが、あれはキリスト教が発祥した中東などの地中海域にはない木です。もちろん「ローマ」にもありません。つまりこれは北方のゲルマン族の地にあるもので、それがクリスマスに取り入れられているということです。しかし理念として、この「ツリー」の風習もキリスト教のものにできたのです。キリスト教的意味づけは、昔、モミの木にぶらさげて神オーディンにささげられた「人身御供」の風習を、人類の罪をしょって、つまり「人身御供」として十字架上で死んだイエスに捕らえ返して、こうした野蛮な風習を昇華させた、ということになります。⁽⁵⁹⁾

クリスマスには「冬至の祭」というものが非常に重要であること、生命のシンボルでもある常緑樹のモミの木が使用されていたこと、贈り物の交換というものがあつた。小澤克彦「13.キリスト教の祭りと行事 1. クリスマス」ではさらにサンタクロースについて次のように説明している。

クリスマスと言えばサンタクロースということになりますが、これもゲルマン人の民間宗教の残したものであり、今日の姿は「商業主義のシンボル」ともなっているものです。

ただしそのモデルは存在していて、四世紀頃の小アジア（現在のトルコ）の地中海沿いにある町の司教であった「聖ニコラウス」がモデルであるとされます。聖とはセイントというわけで、彼は「セイント・ニコラウス」となります。これはなまって「セントコラウス」「シンタクロース」などとなってしまいますから容易に「サンタクロース」となってしまいます。

彼の伝承として伝えられる有名な話しは、ある落ちぶれた男に三人の娘が居たけれど、彼女たちが年頃になっても嫁に出すにもお金がないということで悲しんでいたという。それを哀れんだニコラウスがそと金貨をその家に投げ込んであげたというもので、その時干してあった「靴下」の中にその金貨が入ったとされます。ここからクリスマス・プレゼントは靴下の中にとということになったとされます。ただしこれは「作り話」のようですが、確かにニコラウスが貧しい子ども達にプレゼントをしたということくらいは信じて良いです。

上の説以外にも話しがあつて、それは北欧のゲルマン人の民話にある「贈り物をしてくれる妖精」というものが起源だとされます。北欧神話の妖精（「こびと」であることが多い）たちは気前良く贈り物を贈ってくれるのです。これがニコラウス伝説に重ねられたと言えるでしょう。

北欧では冬至の祭りに互いに贈り物をしたり、また子どもたちに贈り物をする習慣がありましたが、祭りの時に贈り物をするのは万国共通の習慣とも言えます。ですからゲルマン人の冬至の祭りがクリスマスに融合していったとき、当然のようにその贈り物の習慣も継続され、さらに世界中へと広まったといえそうです。

今日の真っ赤な防寒服のサンタクロースですが、これは「コココー

ラ社」が作り出したものとして有名です。それ以前のサンタクロースは年齢も姿もさまざまで、北欧神話にあるように「こびと」であったり、それも子どもであったり老人であったりさまざまでしたが、これ以降サンタクロースは真っ赤な防寒服に身を包んだ恰幅のいい髭のおじいさん、ということになってしまったのでした。⁽⁶⁰⁾

クリスマスはこのように見てくると、その背景にあるものはミトラ教、冬至の祭、ゲルマン人、ケルト人の文化を受け継ぎ、1931年にコカ・コーラ社が赤いマントのサンタでキャンペーンを打った影響を受け、現在のようない商業主義的なクリスマスができ上がったということになる。単純にクリスマス＝キリスト降誕祭とするのは、多文化的に見みればナンセンスということになる。

エピローグ

高等学校の教育課程は新しく改変されることになるが、歴史を単に過去ものとして捉えるのではなく、現在との関わりとして考える、その派生的事象を考察することは歴史をまさしく時空を越えて理解することになる。それは文部科学省が導入しようとしている「歴史総合」の考え方につながり、さらにはハロウィンやクリスマスを通して横断的、探求的、総合的な学習を導くことは可能ではないだろうか。高等学校では「世界史」という科目の範疇では、「ケルト文化」について深掘りすることは難しいだろう。しかし、「総合的な学習の時間」では生徒にとって身近であり、誰もが知っているイベント化した行事が、ヨーロッパからアメリカ、そして日本に辿りつくことで変容していることを考えると、単なる知識だけでは解決しない、まさに知識基盤社会にふさわしい教材になる得るということだ。他にも「バレンタイン・デー」、「イースター」なども同様である。

注

- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（2014年1月一部改訂）
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_3.pdf#search=%27%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%8F%B2%EF%BC%A2+%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%27)(2018年2月15日アクセス)
- (2) 「世界史用語解説 授業と学習のヒント ゲルマン人」
(<http://www.y-history.net/appendix/wh0103-089.html>)(2018年2月17日アクセス)
- (3) 尾形勇他『世界史B』（東京書籍、2012年3月検定済、2016年2月）、p.136.
- (4) Ibid., p.137.
- (5) 木村凌二翻訳監修『英語で読む高校世界史』（シュア、2017年9月）、pp.115-115.
- (6) 全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集』（山川出版社、2016年11月）、p.85.
- (7) 「ハロウィン市場 1220 億円、バレンタイン超え 日本独自のイベントに海外からも評価」
(<http://www.j-cast.com/2015/10/25248645.html>)(2015年11月19日アクセス)
- (8) 鶴岡真弓・松村一男『図説ケルトの歴史』（河出書房新社、1999年8月）、p.11.
- (9) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』（東京書籍、2000年6月）、p.21.

- (10) クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』（創元社、1994年3月）、p.21.
- (11) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』、p.15.
- (12) フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルト—生きている神話』（創元社、1993年7月）、p.36.
- (13) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』、p.23.
- (14) 原聖『ケルトの水脈』（講談社、2016年12月）、p.106.
- (15) フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルト—生きている神話』、pp.62-63.
- (16) クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』、p.97.
- (17) 高神信一「ケルトの再考」（海老島均・山下理恵子編『アイルランドを知るための70章』明石書店、2011年8月、第2版）、pp.45-46.
- (18) 原聖『ケルトの水脈』、p.173.
- (19) Ibid., p.13.
- (20) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』、pp.17-18.
- (21) 木村正俊「ブリテン島のケルト人」（川成洋編『イギリスの歴史を知るための50章』（明石書店、2016年12月）、p.14.
- (22) 原聖『ケルトの水脈』、pp.22-23.
- (23) Ibid., p.127.
- (24) 「ケルト文化 アイルランドにみるヨーロッパの源流」
(<https://www.veltra.com/classic/Ireland3/>)(2018年1月29日アクセス)
- (25) 原聖『ケルトの水脈』、pp.35-36.
- (26) Ibid., pp.37-38.
- (27) Ibid., p.39.

- (28) クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』、
pp.122-123.
- (29) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図
説ケルト』、p.149.
- (30) Ibid., pp.154-155.
- (31) Ibid., p.157.
- (32) フランク・ディレイニー／森野聡子訳／鶴岡真弓監修『ケルト一
生きている神話』、p.117.
- (33) Ibid., pp.121-122.
- (34) Ibid., pp.167-168.
- (35) Ibid., pp.168-169.
- (36) 写真
(http://img.4travel.jp/img/tcs/t/tips/pict/src/111/437/src_11143737.jpg
?20130820160423)(20180204 アクセス)
- (37) 原聖『ケルトの水脈』、pp.182-183
- (38) Ibid., p.207.
- (39) Ibid., p.43.
- (40) Ibid., pp.44-45.
- (41) Ibid., p.115.
- (42) クリスチアーヌ・エリュエール／鶴岡真弓監修『ケルト人』、p.151.
- (43) 「British Highland」
(<http://high-land.org/aboutcelt.html>)(2018年1月31日アクセス)
- (44) 鶴岡真弓・松村一男『図説ケルトの歴史』(河出書房新社、1999年
8月)、p.10.
- (45) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応した
ロゴヴィスタ DVD-ROM より(頁表記なし)
- (46) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2008年1月、第6版)、p.2310.
- (47) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応した

ロゴヴィスタ DVD-ROM より (頁表記なし)

(48) 「ハロウィーン」

<http://dic.search.yahoo.co.jp/search?p=%E3%83%8F%E3%83%AD%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%83%B3&stype=full&aq=1&oq=&ei=UTF-8#14187623071956945>(2015年11月21日アクセス)

(49) タッド・トレジャ／北村弘文訳『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』(北星堂書店、1992年3月)、pp.273-274.

(50) 岡田康男「ハロウィーン」(荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』)、p.492.

(51) サイモン・ジェームズ／吉岡晶子・渡辺充子訳／井村君江監訳『図説ケルト』(東京書籍、2000年6月)、p.152.

(52) 中村美子「アメリカ人とは何か」(中尾健一編『アメリカ入門 12講』三省堂、1982年12月)、p.8.

(53) 岡田康男「クリスマス」(荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』)、pp.183-184.

(54) 新村出編『『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応したロゴヴィスタ DVD-ROM より (頁表記なし)

(55) オスカー・クルマン／土岐健治・湯川郁子訳『クリスマスの起源』(教文館、2006年11月、新装版)、pp.10-13.

(56) Ibid., pp.20-21.

(57) Ibid., pp.37-38.

(58) Ibid., p.95.

(59) 小澤克彦「13.キリスト教の祭りと行事 1. クリスマス」

(http://www.ozawa-katsuhiko.com/13christ_matsuri/christ_matsuri_text/christ_matsuri01.html)(2018年2月23日アクセス)

(60) Ditto.

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第3号
2018年5月15日 発行
武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号
武蔵野教育研究会事務局
武蔵野学院大学 佐々木隆研究室